

国立国語研究所学術情報リポジトリ

現代日本語の動詞のテンス：
言いきりの述語に使われたばあい

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-02-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 重幸, SUZUKI, Sigeyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001733

現代日本語の動詞のテンス

— 言いきりの述語に使われたばあい —

鈴木重幸

も く じ

まえがき	1
第1章 現在未来形	5
第1節 基本的な用法	5
第2節 潜在的な用法	13
第3節 特殊な用法	19
〈付〉 その他の用法	23
第2章 過去形	23
〈付〉 その他の用法	26
第3章 動詞の分類	28
第4章 むすび	34
〈資料とした作品一覧〉	37

まえがき

(i) この小論は、わたしの参加している言語学研究会で、会員が集めたカードを資料にして行なった研究の報告である。このテーマについては、1962年8月と1964年10月に同会で研究発表を行なったが、この小論はあとの発表のさいのプリントを修正し、それに第4章を加えたものである。

(ii) これまでの学校文法、およびその理論的なよりどころとなっている橋本進吉氏や時枝誠記氏の文法論では、言語の基本的な単位としての単語をこまかく切りすぎているところから、動詞の文法的な面は、正当には扱われていない。テンスについても例外ではない。そこでは、動詞の文法的なカテゴリーとしてのテンスはみとめられていない。

大まかにいって、テンス(とき)とは、「～する」と「～した」との対立にみられる文法的な(形態論的な)カテゴリーであるが、「た(だ)」を単語(助動詞)として動詞からきりはなしてしまうと、この2つの形は、一方は動詞、一方

2 現代日本語の動詞のテンス

は動詞と助動詞であって、別のカテゴリーであるから、「～する」と「～した」^{注)}との対立をとらえる必要が、すくなくとも理論的には、なくなる。

注) 単語の認定におけるこのような見解については、次の本をみていただきたい。そこには、こうした見解にたったばあいの動詞の文法的な体系についてのわれわれの試案が述べてある。

『文法教育—その内容と方法—』(教科研東京国語部会・言語教育研究サークル 1963 表書房)

現代日本語のテンスは、松下大三郎・小林好日・佐久間鼎・金田一春彦・三上章・三尾砂・宮田幸一・日下部丈夫の諸氏のような、伝統的な文法論の単語の認定を否定するか、あるいはそれにとらわれない研究者によって、対象としてとりあげられているものである。

なかでも、金田一氏の次の2つの論文は、現代日本語のテンスおよびアスペクトの分野での現在の研究の水準を示すものである。

「国語動詞の一分類」(『言語研究』15号 1950)

「日本語動詞のテンスとアスペクト」(『名古屋大学文学部研究論集X 文学4』1955)

第1の論文は、アスペクトの観点から動詞を分類したものであり、それと関連あるテンス・アスペクトについての豊富な事実が指摘されていて、戦後における現代日本語の動詞のテンス・アスペクトの研究の出発点となった労作である。

第2の論文は、氏自身の発見を含めて、それまでに明らかにされている事実にもとづいて、現代日本語の動詞のテンスとアスペクトの体系化を試みたもので、これもこの分野での最初の総合的な研究である。

(iii) テンスの研究は、だから、金田一氏の2つの論文をのりこえることによって前へ進まなければならないわけである。そのためには、新しい事実をそれにつけくわえなければならない。金田一氏の論文にある事実を並べかえたり解釈しなおしたりしただけでは、そこから飛躍はできないからである。

テンスの研究の現段階で必要なのは、テンスといわれている現象のきめこまかな調査である。具体的にいえば、「～する」とか「～した」とかの形のさまざまな使用例を分析し、それぞれどんな条件でどんな文法的な意味を表わしているかという事実を明らかにしていくことである。

テンスの使用例は多様である。その分析は一挙にはできない。したがって、それは、範囲をいくつかに分け、それぞれの範囲のなかでこまかい分析をし、そこで明らかになった事実を比較し、その相互関係を明らかにしながら、体系的に整理しなおす、という手順でなされるだろう。

(iv) この小論は、この分析の第1段階として、次のように範囲を限定して、そ

こにみられるテンスの意味・用法を分析しようとしたものである。このように範囲を限っても、まだ扱った資料が少なく、上に述べた「きめこまかな」分析には及んでいない。この小論は「きめこまかな」分析へむかうまでの中間報告である。

(a) 言いきりの述語に使われたばあい

すでに明らかなように、現代日本語の動詞のテンスは、言いきりの述語に使われたばあいと、連体的その他の用法で使われたばあいとは、ことなつた面があるからである。(終助詞のついたものも言いきりに含めた。)

(b) 肯定の断定形

わたしの考えでは、テンスの形は、下の表のように、ムードのちがいでよつて、断定形と推量形に分かれ、みとめ方によつて、肯定形と否定形に分かれるが、このうち、範囲を肯定の断定形に限定した。肯定形と否定形とは、テンスの意味のあらわれ方にことなつたところがある。また、断定形と推量形とは、テンスの意味のあらわれ方がちがうかどうか明らかでないが、作業を単純にするために、推量形をはぶいた。

したがつて、この小論でとりあげる範囲は、「よむ」を例にとれば、次の表の太いわくの中の形が言いきりの述語に使われたばあいだけである。

ていねいさ ムード みとめ方 テンス	普通体				ていねい体			
	断 定		推 量		断 定		推 量	
	肯 定	否 定	肯 定	否 定	肯 定	否 定	肯 定	否 定
現在 未来	よ む	よまな い	よむだ ろう	よまな いだろ う (よむ まい)	よみま す	よみま せん	よむで しょう	よまな いでし ょう
過 去	よんだ	よまな かった	よんだ ろう よんだ ろう	よまな た だ ら う よまな た か っ た ら う	よみま した	よみま せん で し た	よんだ でし ょう	よまな か っ た で し ょう

注) 「よもう」の形を未来を表わすテンスの形とする説がある。また、「よんだ」の形を、テンスの形ではなく、確認という話し手の態度(ムード)を表わす形であるとする説もある。ここでは、このいずれの説にも従っていない。これについては、金田一氏の「日本語動詞のテンスとアスペクト」4~5ページを参照。

なお、テンスときわめて密接な関係にある文法的なカテゴリーとして、アスペクト(すがた)がある。ここでは、そのうちの基本的なアスペクト(基本態……

4 現代日本語の動詞のテンス

補助動詞のつかない形)だけを扱った。したがって、「～している」「～してある」「～してしまう」「～してみる」「～していく」「～してくる」……などの形はとりあげなかった。

以上のように限定した範囲のテンスの使用例を文学作品^{注)}の会話文から集め、それを資料とした。地の文やト書きを除いたのは、そこには、いわゆる「歴史的現在」のような、テンスの形の文体論的な使用の例がみられ、それをあらかじめ資料から除いておくためである。

注) 資料とした作品については、末尾の表参照。なお、引用にあたっては、表記法をわたしの判断で“現代表記”に改めた。

(v) このように範囲を限定したために、次のような問題が生じる。すなわち、われわれが扱う形は、テンスとそれ以外のカテゴリーがかきなりあった形であり、しかも言いきりの述語に用いられたかぎりのそれであるから、そこで表わされている意味がはたしてテンスの意味であるかどうか、という分析が十分にはできないことである。

ここでは、純粹にテンスの表わす意味を明らかにするというよりも、これらのカテゴリーに条件づけられた現在未来形の意味のうち、テンス的だと考えられる意味に注目するということが当面の仕事となる。

注) 『世界言語概説(下巻)』(1955)で、金田一春彦氏が、ここでいう過去形について次に述べられる事柄あるいは話してゐる時より以前であることを表はす。(176ページ)

としたのに対し、監修者注として、服部四郎氏が

「次に述べられる事柄」或いは「話してゐる時」といふ二本立てで説明するより、《その動詞の表はす動作・作用を以前に終了した》といふ意義素一つで十分であるとする方が勝れてゐる。(304ページ)

と述べている。つまり、過去形(あるいはモルフェーム「た(だ)」)の意味は、「以前」であって、その基準はそれ以外のものが表わすのみなのである。

わたしは、ここでは、言いきりの述語に使われているという条件のなかのテンスの形を扱っているので、このような抽象は問題にしていない。この問題については、言いきり以外に使われた形についての考察とあわせて、改めてとりあげたい。

(vi) テンスというカテゴリーは、動詞だけにあるのではない。形容詞(形容動詞)にもあるし、名詞の“用言なみの形”(「～だ(です)」)にもある。テンスは、“用言”のもっているカテゴリーだというべきかもしれないが、ここでは、こうした問題にはふれない。

(vii) テンスの形には、現在未来形と過去形の2つがある。この2つの形はおた

がいにかを前提として、その対立のなかでそれぞれの意味をもっている。ここでは、現在未来形からとりあげる。

第1章 現在未来形

第1節 基本的な用法

(1) 現実のことがらは、時間的な存在である。現実の特定の時間にあらわれた(あらわれる)動作や状態を動詞述語文で表わすばあい、動詞は、ムードの形としては主として断定形あるいは推量形が使われる。

断定形と推量形の意味のちがいは、大まかにいって、話し手にとってその現実のことがらがたしかなものか認められているか、あるいはふたしかなものか、という点である。断定形も推量形も、ともに話し手にとって認識された現実のことがらを表わす点は共通である。(この点で、これらのムードの形は、テンスのない他のムードの形——意志形と命令形——と区別されるわけである。)

現実であらわれた(あらわれる)ことがらを表わすということは、動詞の表わす語法的な意味——動作や状態など——と現実との関係が示されるということであり、具体的には、その動作や状態が、現実のいずれかの時間に結びついているという、現実の時間との関係が示されることである。

断定形と推量形というムードの形には、テンスの形——現在未来形と過去形——があって、その形によって、動詞の表わすことがらと現実との関係が示されるわけである。

そこで、「断定」と「推量」というムードは、テンスとのかたく結びついていて、具体的には、テンスの形で現実の時間との関係が示されることによって、ムードとしてなりたつ、といわなければならない。

ここでは、言いきりの述語に使われた断定形のテンスの形の意味・用法を扱うが、このばあいの現在未来形と過去形の意味は純粋にテンスの意味であるというよりも、テンス・ムードの総合的な意味だといふべきだろう。

注) ただし、ここでは、言いきりの述語に使われた現在未来形と過去形のムードとしての意味・用法を全面的に扱うことはしない。

たとえば、断定形には、現実のことがらを表わさず、非現実のことがらを仮定として表わす用法があるが、こうしたばあいについては、ここでは扱わない。また、断定形は、終助詞「か」の付属や、しりあがりのイントネーションその他の手つづ

6 現代日本語の動詞のテンス

きによって、質問の意味を表わす。このようなことも、ここでは扱わない。ここでは、断定形の現在未来形と過去形のムード・テンスのうち、テンスの面に注目して、その意味・用法を調べるのがねらいである。

(2) 動詞のテンスの形は、現実の時間を反映したものであるが、その時間をはかる基準は、基本的には《話（発言）の瞬間》である。話の瞬間を基準にしたばあい、時間は、現在（話の瞬間）と過去（話の瞬間よりまえの時間）と未来（話の瞬間よりもあとの時間）とに分けられる。

言いきりの述語に使われた動詞の表わすテンスの形の基本的な用法は、動詞の表わす語法的な意味（動作や状態など）が現実の特定の時間にあらわれた（あらわれる）動作や状態などをさし示すばあいであろう。

よく知られているように、こうした基本的な用法では、動作を表わす動詞の現在未来形は、現在（進行中）の動作をさし示すことができないの^{注)}に対し、状態を表わす動詞では、現在の状態をさし示すことができる。

1) 「どうもおやすみのところを。」「なにあに。寒いもんだから寝床にもぐりこんじゃいたが、まだ眠ったわけじゃありませんや。——今、火を起こします。」（山本有三 波 27）

2) 「あら。こいがありますわ。白いこいがありますわ。」（川端康成 舞姫 23）

注) 現在進行中の動作は、持続態のアスペクトの現在未来形(「～している」の形)で表わす。(「今、火を起こしています。」)

基本的な用法では、動作を表わす動詞が現在未来形をとったばあい、その動作があらわれる特定の時間は未来に属する時間に限られる。つまり、このばあいの現在未来形の表わす時間は未来である。

これに対し、状態を表わす動詞が現在未来形をとったばあい、その状態があらわれる特定の時間は、現在または未来に属する時間である。つまり、このばあいの現在未来形の表わす時間は、現在または未来である。次の「いる」は未来の特定の時間における状態をさし示している例である。

3) 「品子、駅で待っていて……。」「はい。横須賀線のホームにいます。」（舞姫 180）

このばあい、現在であるか、未来であるかのちがいは、現在未来形が表わすのではなく、文脈や場面や、時間を表わす連用修飾語（状況語）などが示すのである。（実際の使用例では、現在の状態をさしているばあいが圧倒的に多いようであるが。）したがって、このばあいの現在未来形の表わす時間は、^{注)}現在と未来とを同時に含む時間——現在未来——であるといった方が正確である。

注) ここで現在というのは、話の瞬間を含む、ある幅をもった時間をさす。その幅

は、長いこともみじかいこともあり、ばあいによってことなる。つまり、過去から現在まででも、現在から未来まででもともに話の瞬間を含んでいれば、現在ということができる。

「あの人はさっきからここにいます。」

「きのうきたサーカスは来週の日曜日までこの町にいます。」

なお、「現在」と「現在未来」とのちがいは、後者は、単なる未来を含むが、前者はそれを含まないという点である。例の3は現在未来の状態ではあるが、現在の状態ではない。

(3) 意志動詞が話し手の動作を表わすばあい、未来の動作は話し手の意志にかかわるから、現在の話し手の《これから動作を行なう》という意志をも表わしていることにもなることがある(例の4, 5, 6, なお例の1も)。また、意志動詞が相手の動作をたずねるばあい、相手の現在の意志をたずねることにもなることがある(例の7, 8)。これらは、こうした条件におかれた現在未来形の断定形のムードの意味あるいはニュアンスであって、テンスの意味としては、未来であろう。(例の9では、話し手を主体にしても、現在の話し手の意志ではなく、すでに予定された未来の事実をいっている。)

4) 「あなたはあっちへいらっしゃい。あたしはこっちへ行きますわ。〜」(波 301)

5) 「今夜はあたし看護するわ。〜」(波 213)

6) 「私は率直に申しあげます。私は、〜」(石坂洋次郎 青い山脈 55)

7) 「すぐ帰ってくるけれど、君はどうする?〜」(徳田秋声 縮図 120)

8) 「島崎さん、あなたにちょっとご用談したいことがあるんですが、二階のぼくの書斎まで来て下さいますか?」(青い 294)

9) 「私あすアメリカにたちますの、ひとりで」(有島武郎 或る女(前編) 57)

なお、小中学校などで、教師が、特殊なイントネーションで、命令の意味ないしニュアンスをこめて、現在未来形を使うことがある。

(4) そこで、言いきりの述語に使われた現在未来形のテンスの意味は、すくなくとも2つあり、多義的であるといわなければならない。^(注)だから、その多義的な意味の相互関係を明らかにし、それぞれの意味が実現する条件を明らかにする必要があるだろう。

注) 金田一春彦氏は「日本語動詞のテンスとアスペクト」においてテンスを動作相のテンスと状態相のテンスとに分けている。金田一氏によれば、わたしのいう現在未来形は、動作相のテンスとしての「未完了態」と状態相のテンスとしての「非過去態」という2つに分かれ、前者は、わたしのいう「未来」を表わすばあい、後者は、「現在未来」を表わすばあいに相当する。金田一氏の説とわたしの説とは、ともに2つの意味をみとめた点で一致するが、次の点でことなっている。

8 現代日本語の動詞のテンス

- i) わたしは、この2つの意味は、1つのテンス（現在未来形）の2つの意味だとするが（文法的な多義性——多義形）、金田一氏は、2つのテンスとする。金田一氏のみかたは、結果として、これを文法的なホモニム（同音異義形）とみなすことになる。（金田一氏の論文では、この点が明言されているわけではない。そこでは、まず意味（態）をあげ、次にそれを表わす形を求めるという記述方法がとられているので、意味と形との関係についての金田一氏の態度は明確にはわからない。）
- ii) この2つの意味の特徴づけについて、わたしが、話の瞬間からみた時間的な意味だとするのに対し、金田一氏は、（言いきりの述語のばあいにかぎってわたしなりに言いなおせば）一方は話の瞬間からみた時間（非過去）であり、一方は話の瞬間からみた動作のあり方（未完了）であって、特徴づけの側面がこととなっている。

（5）現代日本語の動詞には、テンスの形は2つしかない。ところが、話の瞬間を基準としてはかる現実の時間は、現在・過去・未来と3つある。

第2章であげるように、過去形は、過去を表わす。したがって、状態を表わす動詞では、現実の時間を現在未来と過去というように二分して示す。動作を表わす動詞のばあいは、2つのテンスの形がそれぞれ、未来と過去を表わし、どちらも現在は表わさない。つまり現代日本語では、動作というものは、話の瞬間にとって、すでにおこったものか（過去）、まだおこっていないものか（未来）のいずれかに分かれる。

{ 「今、火をおこしました。」（過去）
{ 「今、火をおこします。」（未来）

そのかわりに、動作を表わす動詞には持続態^{注)}というアスペクトの形が発達していて、話の瞬間に行なわれている動作は、その現在未来形のテンスの形が現在未来における進行の状態として表わすことができる。

「今、火をおこしています。」（現在未来）

注) 持続態というのは、動作動詞のもつアスペクトであって、基本的な用法として動作の進行中（あるいは結果）の状態の持続という側面を表わすアスペクトである。このばあいのテンスの基本的な用法は、基本態の状態動詞のテンスの基本的な用法とかわりない。

これに対して、基本態のアスペクトは、動作を表わす動詞のばあい、進行中の状態や結果の状態など、状態的な側面を問題にせず、もっぱら、その動作全体を1つの状態変化として表わすものである。

このように、現代日本語では、動詞の表わすことがらが、文の中で現実の時間とどうむすびつけられるか、というテンス的なものと、そのことがらが動作的な

ものであるか、状態的なものであるか、というアスペクト的なものがからみあっているのである。日本語のテンスは、アスペクトとからみあって現実の時間を表わすわけである。

大まかにいって、動詞のテンスの意味は、①動作の実現の時間が未来であるか、過去であるか、②状態の持続の時間が現在未来であるか過去であるか、というように分化しているが、現在未来形における、未来と現在未来という2つの意味は、動詞のアスペクトの形の表わすことがら、動作であるか状態であるかというアスペクト的な性格によって分かれているのである。

そこで、テンスは、アスペクトとからみあったテンス・アスペクトの体系の中のテンス的な側面としてとらえなければならない。

ここでは、問題を単純にするために、基本態というアスペクトにおけるテンスに範囲をかぎっているが、そのばあいにも、アスペクト的な面はきりすてられない。結局、基本態の各テンスにおけるテンス・アスペクトを扱うことになる。

注) このばあいも、基本態のアスペクト的な側面を全面的に扱うことはしない。テンス的な側面を明らかにするのに必要なぎりぎりアスペクト的な側面を扱うことになる。テンス的な側面とアスペクト的な側面との正確な分析は、さらに各アスペクトとそれのテンスとを調べるなかで、行なわなければならない。なお、これについては、第4章を参照。

(6) 現在未来形における2つの意味のうち、どちらが基本的なものであるかは、歴史的な研究を含めた一層深い研究にまたなければ、はっきりしたことはいえない。

注) 未来と現在未来とは、一段と抽象的な1つの意味に統一できるかもしれない。たとえば、三上章氏は、《未了》という概念でこれをまとめている（『現代語法序説（旧版）』1953）。しかし、完了・未了（未完了）という概念は、動作的なことがらにはあてはまるが、状態的なことがらについては、ちょっとむりである（金田一「日本語動詞のテンスとアスペクト」4ページ参照）。

想像をたくましくするならば、歴史的に、完了というアスペクト的な意味をもつ形式「〜タリ」が、過去というテンス的な意味に移行してきたのに並行して、それに対立する形式（動作動詞の未了形？）が「未了（未完了）」から、未来というテンス的なものへ発展したと考えられるかもしれないが、古代語のテンス・アスペクトの構造がはっきりしていないので、はっきりしたことはいえない。

ただし、三上氏の指摘しているように、現在未来形に未完了、過去形に完了のニュアンスがあることがあるのは事実であろう（『現代語法序説（旧版）』219ページ）。

資料には適当な例は見あたらなかったが、

10 現代日本語の動詞のテンス

「むこうから変な人がきますよ。」

「あ、(麦わら)帽子が飛ぶ！」(三上「現代語法序説(旧版)」219ページ)

「あ、鉄板が落ちる！」

などは、現在話し手がみとめた動作であるが、まだこの動作は話の瞬間にはおわっていないので、テンスの意味としては未来であろう。このばあいは、未完了的なニュアンスがつきまとう。

三尾砂氏は、次の例を《眼前に進行中の事実を、情感的に表現する場合》に入れているが、これも未完了的なニュアンスをもった未来の動作ではないかと思われる(「話しことばの文法(改訂版)」(1958)84ページ)。

「やあ、お嫁さんが行く。」

ただし、「～していく」「～してくる」というアスペクトの形は、現在の進行中の動作を表わすばあいがあるようである((50)の注参照)。上にあげたものも、これにつながるもので、なお検討の必要がありそうである。

(7) さて、基本態にかぎっていえば、動詞の表わすことがらが、動作であるか状態であるかに応じて、その現在未来形のテンスの意味がことなっている。だから、基本態の現在未来形のテンスの2つの意味が実現するための第1の条件としてあげられるのは、動詞の語的な意味の性格である。

そこで、動詞の表わすことがらが、現実の個々のことがらを表わすばあい、つまり、(2)でいった基本的な用法で、その動詞の現在未来形が未来を表わすか、現在未来を表わすかという観点で、動詞を分類する必要がおこる。金田一氏に従^{注)}て、前者を《動作動詞》、後者を《状態動詞》と呼ぼう。

注)「日本語動詞のテンスとアスペクト」で用いられている。

同氏の「国語動詞の一分類」では、動詞を4種に分類している。ここでは、動詞を状態動詞・継続動詞・瞬間動詞・第四種動詞とわけているが、ここでいう動作動詞は継続動詞・瞬間動詞に相当する。(第四種動詞は言いきりの述語としては基本態の現在未来形が使われないから当面の問題にはならない。)

継続動詞・瞬間動詞の区別は、主として持続態のアスペクト(「～している」)とからんで問題となるものであって、ここで扱っている基本態のアスペクトのばあいには、一括してかまわない。この2つは、持続態の基本的な用法で、特定の時間における動作・作用の進行の状態を表わすものと、動作・作用の結果の状態を表わすものという点できわだちがいを示すが、基本態のアスペクトのばあいは、どちらの動詞も、動作・作用の進行や結果の状態は問題にならず、動作・作用全体としての変化だけが問題となる。(ただし、ニュアンスにちがいがおこることはあるようである。これについては(35)参照。)動作・作用が進行している時間がいくら長くても、基本態では、その動作・作用の進行のプロセス(状態)は問題にされず、動作・作用全体を1つの変化として表わすわけである。

なお、あとで述べるように、ここでいう動作動詞と状態動詞と、金田一氏の分類とは、分類原理と動詞の所属のさせ方においてかならずしも一致するものではない(第3章参照)。

(8) 動作動詞にはいるのは、(2)であげたような人間の具体的な動作を表わす動詞のほかに抽象的な精神活動や物理的な作用や化学的な変化や社会的な状態変化など、何らかの意味での状態変化を表わす動詞である。大多数の動詞は動作動詞である。

10) 「そのかわりすぐアダムがつきますよ。〜」(青い 299)

11) 「木村さん。あなたはきっと、しまいにはきっと祝福をお受けになります……〜」
(惑る女 228)

12) 「〜。おにいさんの運命はきっと今にひらけますよ。〜」(武者小路実篤 その妹 81)

13) 「〜。待っててちょうだい。いま、すぐあったまるわ。」彼女はミルクのピンを銅つぼの中にひたした。(波 179)

14) 「でも兄は近々結婚いたしますよ。」(夏目漱石 三四郎 232)

15) 「できるだけとうさんもお前を助けるよ。」(島崎藤村 嵐 60)

16) 「縁起だなへお灯明をあげて、そしてお祈りをしましうよ。私も拝みますわ。」
(泉鏡花 日本橋 158)

17) 「しかしこれからは日本もだんだん発展するでしょう」と弁護した。すると、かの男は、すましたもので、「亡びるね」といった。(三四郎 18)

(9) 状態動詞には、状態や性質を表わす動詞がはいる。動作動詞が状態の変化を表わすのに対し、状態動詞は状態の不変化を表わす。状態動詞の数はあまり多くない。

具体的な状態を表わすものには、(2)にあげた「いる(いらっしゃる)」のほかに「ある(ございます)」がある。

18) 「里見のお嬢さんは、まだ来ていないか」「来ている」「どこに」「二階にいる」
(三四郎 91)

19) 「——ね、ここに宿屋ある？」〜「え、ございますとも。」(波 261)

20) 「いいえ、手前が持ってまいったんですから、まちがいはございません。——あ、そこにあります。その戸だなの上のところ。」(波 37)

「ある」は抽象的なことがらの存在をもさすが、このばあいも状態動詞である。

21) 「だけど、スタンウエのオウ型なんか、今の私は、買えそうにありませんし、あのピアノには、思い出もありますもの。」(舞姫 231)

また、「ある」は他の単語とくみあわせをつくって、全体でいろいろの性質や状態を表わすことが多い。このばあいも、「ある」は状態動詞であることに変わ

りはない。

- 22) 「だいぶ熱がある。薬をのまなくっちゃいけない。～」(三四郎 271)
 23) 「あれほどに人工的なものはおそらく外国にもないだろう。人工的によくこんなものをこしらえたという所を見ておく必要がある。～」(三四郎 102) * 人形
 24) 「あなただけでなく、世間の男の人たちは、女だけが特別シット深いもののように考える傾向があります、～」(青い 305)
 25) 「～。——先生は偉いところがあるよ。～」(三四郎 137)

なお、「もよおしもの、事件などがある」「便りがある」など、現象がおこることを表わす「ある」は現在を表わさず、動作動詞である。

- 26) 「どこからか便りがあるよ、きっと好い便りがあるよ——盛岡かな。」(島崎藤村 春 147)
 27) 「いやですわ、この車……。悪いことがあるわ。こわいわ。」(舞姫 8)

(10) 次に、状態動詞にはいる動詞に、《形容詞(形容動詞)語幹+すぎる》というつくりをもつ動詞がある。

- 28) 「里見さん。あなたがひとえものを着てくれないものだから、着物がかきにくくって困る。まるでいい加減にやるんだから、少し大胆すぎますね。」(三四郎 231)
 29) 「おまえは少しいじ過ぎるよ。きらいになりだすと、何でもかでもきらいになるが、そうかたよった考え方をするのは……」(波 350)
 30) 「～。あなたの情夫にしちゃちと野暮天すぎるネ。」(二葉亭四迷 浮雲 137)
 31) 「美彌子さん？」と聞きながら、柿の木の下にあるわらぶき屋根に影をつけたが、「少し黒すぎますね」と絵を三四郎の前へ出した。三四郎は今度は正直に、「ええ、少し黒すぎます」と答えた。(三四郎 107)

なお、これに類したものに、《形容動詞語幹+きわまる》という動詞がある。この種の動詞は現在未来形しか使われないようで、特殊な動詞である。

- 32) 「～。課長も課長だが、残された奴らもまた卑屈きわまる。～」(浮雲 34)

なお、このほかに、ふつつ状態動詞とされているものには、いわゆる可能動詞や関係を表わす「ちがう」「あたる」などがある。これについては、第3章でとりあげる。

(11) 性質を表わす動詞は、現在未来形で現在の性質を表わすことができる点で、状態動詞にはいるが、性質というのは、ものごとの恒常的属性であって、一時的な属性である状態ほど時間との関係が正面に出てこない。性質を表わす動詞が現在未来形で現実のものごとの性質を表わすばあい、その表わす時間は、特定の現在未来というよりも、もっと一般的な、限定をうけていない時間——一般時(あるいは超時間)——であるとした方がよさそうなばあいがある。たとえば、

例の29など。しかし、一般時(超時間)というものは、現在未来から区別して独立のテンスの意味とするほど、はっきりした位置をしめるかどうか疑問である。むしろ、現在未来という意味がこうしたばあい^(注)に一般時的なニュアンスを持つ、とみた方がよいだろう。

注) これについては、なお(46)の補注参照。

ふつう性質を表わす動詞でも、何らかの意味で時間の限定を受けているばあい^(注)には、特定の現在未来の性質あるいは状態を表わすのである。

注) たとえば、「S温泉の湯は熱すぎる。」と「きょうの湯は熱すぎる。」とを比較せよ。

第2節 潜在的な用法

(12) 第1節でとりあげた基本的な用法は、(性質のばあいは問題があるとしても)動詞の表わす動作・作用や状態が現実の特定の時間(未来あるいは現在未来に属する)にあらわれるばあいを示す用法である。特定の時間にあらわれるということは、動詞の表わす動作・作用や状態と、それをもつ主体との関係が、特定の時間になりたつ^(注)ということである。その特定の時間においては、その関係は現実のものになっているわけであり、その時間にとって、その動作・作用や状態は顕在的(アクチュアル)なものである。

ところが、テンスの用法には、主体とその動作・作用や状態との関係がいつなりたつかという個々の特定の時間が捨象され、その関係だけが抽象され、その主体が潜在的(ポテンシャル)にその動作・作用や状態をもっているということを表現する用法がある。この用法は、動詞の表わす動作・作用や状態があらわれる特定の時間との関係を示すテンスの形の基本的な用法に対立する。これを、ここでは、テンスの形の「潜在的(ポテンシャル)な用法」と呼ぼう。これは、基本的な用法をもとにして、そこから派生した用法であろう。

注) あとであげるように、動作・作用と関係する対象や題目との関係が抽象されるばあいもある(例56など)。

潜在的な用法については、まだじゅうぶんな分析・整理ができていない。便宜上、典型的なばあいとして、次のような3つのばあいに分けて考察しよう。

(i) くりかえしあらわれることがらを表わすばあい

(ii) 一定の条件のもとにおこることがらを表わすばあい

(iii) 主体(対象)の潜在的な属性として表わすばあい

〔その1〕 くりかえしあらわれることがらを表わすばあい

(13) これは、おなじ動作・作用の状態がことなった時間にくりかえしあらわれ
るばあい、その動作・作用や状態を一括して表現する用法である。

33) 「うん、昼すぎおそくならないかもしれない。」「どこかへ行くのか」「行くとも、
毎日毎日絵にかかれに行く。もうよほどできたろう。」(三四郎 222)

34) 「～。あたくし一言申し上げておきますが、あたくしの方から駿さんをおきそい
したことはないですよ。いつも駿さんの方からやってきますの。～」(波 369)

35) 「そうね。映画ごらんになります?」「時々見る。～」(縮図 48)

36) 広次「おじさんのうちのことを時々考えるかい」静「時々は考えますわ。」(その
妹 66)

37) 「第一に、あの年ごろの少女の感傷性をもっておりません。だからめったに泣き
ませんし、とどきき女の子らしくない思いきったこともいたします。」(帯い 206)

38) 「ぼくは今、我善坊の××番地にいる。夜はいつでもいる。遊びに来たまえ」
(志賀直哉 暗夜行路(前編) 291)

39) 「時々は憎むべき人間だと思うが、時々はなんだかかわいそうでたまらなくなる
時がある。～」(或る女 204)

40) 「おかげで、好い家ができました。太郎さんにくれるのは惜しいような気がし
てきました。これまでに世話して下さるのもなかなか容易じゃありません。私もま
た、時々、本でも読みに帰ります。」(嵐 66)

上の例の33～39は過去から未来にかけて、つまり、幅のひろげられた現在にく
りかえしあらわれる動作・作用や状態を表わし、例の40は、未来にくりかえしお
こる動作をあらわしている。
注1)
注2)

注 1) 未来にもあらわれることが問題にされていなければ、過去形が使われるだろう。

注 2) 未来にくりかえしあらわれる状態を表わすばあいもありうる。たとえば、「来年
になれば、定年だから、それからは、毎日ひるまうちにいるよ。」のように。

このばあい、現在と未来とは、状態動詞の基本的な用法とおなじく、テンスの
意味としては一括して、現在未来とすべきであろう。

(14) こうしたばあい、動詞の表わすことがらが、現在未来のうちのある範囲の
中でくりかえしあらわれるのだから、そのおこる時間には、そのことがらは、顕
在的なものであるが、その時間は、この用法のテンスにとって問題にされていな
いことに注意する必要がある。

現実の特定の時間が(話の瞬間を基準にして、あるいは日付けなどで)明示さ
れているばあいには、この用法はなりたたない。たとえば、「おとといの朝も、
きのうの朝も、けさも、あしたの朝も絵をかかれに行きます。」というような文
はなりたたないだろう。
注)

注) 「あしたの朝も、あさっての朝も……行きます。」という文はなりたつ。このばあいは、「あしたの朝も行きます。」「あさっての朝も行きます。」…… というような文とおなじく、特定の未来(複数)において実現する動作を表わすのであって、基本的な用法である。

くりかえしの用法であることを示す条件としては、「時々」「毎日」「いつも」……のような連用修飾語(連用規定語)や文脈・場面などがある。

〔その2〕 一定の条件のもとにあらわれることがらを表わすばあい

(15) これは、一定の条件がそなわると、一定の動作・作用があらわれるということであって、その条件がなりたつかぎり、何回でもそのことがあらわれるという点で、くりかえしのばあいと似ている。しかし、ここでは、くりかえしあらわれることが問題なのではなく、条件のなりたつときにあらわれることが問題なのであって、^{注)}事実としてはくりかえしを前提としているが、表現としてはそうではない。

41) 「これは、中学生のばあいでいいますと、たばこを吸うようなもので、在学中は悪いことかもしれないけど、卒業すれば悪いことではなくなります。〜」(青い 165)

42) 「かたいけれどもうまいでしょう。よくかまなくっちゃいけません。かむと味が出る。」(三四郎 135)

43) 「旅に出るといろいろなことを覚えるね。〜」(島崎藤村 春 17)

注) この条件が、仮定のものであるときには、全体は仮定の文になってしまう。仮定の文は、この小論では扱わない。また、条件でも、未来の特定の時間を示すようなばあいには、テンスの用法としては、基本的な用法である。

44) 「ぼくなぞは、そう長く生きる人間じゃないような気がする。二十五という年齢がきたら、多分死ぬネ」(春 78)

この用法では、条件は用言や用言に準じる形式(名詞+指定の助動詞)の条件の形(〜スレバ、〜シタラ、〜スルト)で示されるほかに、「朝・春……」というような時間(話の瞬間を基準にした時間や日付けなどで示される時間でないもの)を表わす名詞によっても示される。(「つばめは春日本にやってくる。」)

上の例は、話の瞬間を含む幅の広い現在において、条件がなりたつばあいにおこる動作作用をさしているが、その時間的な範囲が未来にかざられるばあいもある。^{注)}

注) 資料にはなかったが、たとえば、「来年からは女房がうちにいるから、家へかえればすぐに晩ごはんになる。」のような表現がありうるだろう。

条件のなりたつ時間的な範囲が現在であるか未来であるかのちがいは、文脈・場面や連用修飾語などが示すのであって、このばあいのテンスの意味としては、

16 現代日本語の動詞のテンス

この2つのばあいを一括した現在未来であるとするべきであろう。

なお、〔その2〕の用法は、状態動詞にもある。ただし、このばあい、条件を示す形式は、条件形があまり使われず、「……するとき」「……する^{注)}ばあい」や「朝」「春」のような形式が使われるだろう。

注) たたとえば、「天気のばあいには、外で仕事をしていますが、雨の降った日には家にいます。」など。

(16) なお、次のようなばあいは、現に実現した(している)ことを条件として実現した動作・作用について述べたものであるが、表現としては、(15)のばあいと同じく、条件づけられたときにあらわれることがらとして一般化して述べたものであろう。^{注)}

45) 「おい、新前のコックさん、指を切らないように頼むよ。」「だいじょうぶだよ。だが、こんなことをしていると、君と自炊していたころが思い出されるね。」

(波 16)

46) 「いや、そうおっしょられると、かえって恐縮いたします。」(波 368)

47) 「～。ああいうことをすでに言っている人があるかと思うと、驚くよ。～」(春 55)

48) 「六さんはけしからん。女学生と組むと、実力以上のプレーをする……」(青い 74)

49) 「またほころばしたね。しょうのない子だな。おとうさんには針が持てないんだから、あんまり乱暴なことをしちゃ困るよ。え、駿。」(波 318)

注) ただし、例48を除いて、言いきりの動詞は、話し手の態度に関係する動詞であって、第3節でとりあげる用法であるとみるべきかもしれない。

〔その3〕 主体(対象)の潜在的な属性として表わすばあい

(17) 次の例では、事実としては一定の条件のもとで一般的になりたつ動作・作用であるが、そのなりたつ条件が示されていない。そのために一層、その動作・作用の実現の面は背後にしりぞき、その主体や対象が、動作・作用をする(受ける)属性(性質・習慣・くせ・性格・傾向・可能性……)を潜在的にもっているという性格がつよくなる。

50) 「～。宿屋や料理屋は座敷を売り物にするんだし、医者は——」「お薬は九層倍に売ります。それから、ときどきミスがある技術を売りますわ。～」(青い 301)

51) 「あの人は大変にぎやかな人ですね。」～「ええ。よくしゃべります。」(三四郎 143)

52) 「この学校には県立の女学校の試験に落第した人が多くはいます。～」(青い 23)

53) 「世間はいろいろなこと言いますわ。～」(縮図 137)

54) 「～。言うものは亡びますが、言われるものは勝ちます。」(その妹 70)

「申す」「書く」という言語活動を表わす動詞は次の例では、名前や字を示すのに使われている。

55) 「私、笹井和子と申します。どうぞ、よろしく。ホホ……」(帯い、114)

56) 「～。——お名まえは。」「ススムです。馬への駿馬の駿という字を書きます。」
(波 147)

例の56では、「書く」動作の主体は一般化されていて、問題にならず、「字を書く」というくみあわせで、「ススム」という题目的な対象(?)との関係が潜在的になりたつことが示されている。^(注)

注) 「大根は葉をすてます」のような文についても同様のことがいえる。なお、例の52も、「学校に」と「……した人がはいる」との関係が一般化されているとみられる。

この用法であることを示す条件としては、文脈・場面、および一般的なことがらを表わす「文型」^(注)などがある。

注) これについては、まだじゅうぶんしらべられていないが、係り助詞の「は」などがはたらいているだろう。

(18) 以上あげた例は、動作動詞の例であるが、状態動詞が用いられた例もある。たとえば、例の38のはじめの文の「ぼくは、今我善坊の×××番地にいる」の「いる」がそうである。この「いる」は言いかえれば、《住んでいる》ということであって、話の瞬間にそこにいるわけではない。しかし、「いる」の語意的な意味は、ふつうの「いる」と同じであって「住んでいる」という意味ではない。たまたま話の瞬間にはそこにいなかったけれども、主体とその「場所にいる」^(注)との関係は、習慣として潜在的にたもたれているのである。

注) この点から、7ページであげた、「きのうきたサーカスは来週の日曜日までこの町にいます。」なども、潜在的な用法かもしれない。

このように、話の瞬間に状態の持続が顕在していないばあいには、状態動詞がこの用法で用いられていることははっきりしているが、次のような例では、現在も「いる(おる)」のであって顕在しているわけで、基本的な用法であるか、潜在的な用法であるか、はっきりしない。

57) 「～。宿屋でも料理屋でも、お金を払うお客さんは、上等な室に入れて、家族はたいてい粗末な室におりますわ……」(帯い、301)

(19) 主体(対象)の潜在的な属性を表わすばあいは、話の瞬間を含む幅の広い現在における主体の潜在的な属性を表わすことが多い。しかし、未来のある期間における潜在的な属性を表わすばあいもありうる。

18 現代日本語の動詞のテンス

たとえば、例52を未来に限定したばあいがそうである。

52) 「来年からは、この学校には県立の女学校の試験に落第した人が多くはいます。」

ただし、未来のばあい、よほど文脈や場面その他で、潜在的な属性であって特定の時間における実現・持続ではないことがはっきりしていないと、基本的な用法のばあいとの区別がはっきりしないことがある。上の例でも、来年からの特定の時間における「はいる」という動作の実現を表わしているのとれないことはないだろう。しかし、だからといって、未来における潜在的な属性を表わすばあいを否定することはできないだろう。

注) たとえば、「彼女はことしのすえ大阪の人と結婚するから、来年からは大阪にいる。」といったばあい、里帰りや旅行などで、来年以降の特定の時間には大阪はなれているかもしれないのである。

(20) 潜在的な用法の典型的なばあいとして、以上3つのばあいを見てきたが、このばあいの現在未来形の表わすテンスの意味は、いずれも現在未来であるということができる。つまり、テンスという観点からは、この3つのばあいは質的なちがいではなく、これらを区別する必要はないのではないかと思われる。^{注)}

注) これについては、なお、第4章参照。

(21) 潜在的な用法に属すると思われるものとして、資料にはなお次のような用例があった。このばあい、問題になっている動作・作用は現実には話の瞬間にとつてすでにおこったことか、現におこっていることであるが、その動作・作用の実現の時間（あるいは、実現という側面）が問題にされているのではなく、動作・作用の質的・量的な側面が、主体の潜在的な属性として表現されているとみなされる。

58) しかし、それから半月ほどすぎてたずねていった時には、駿は少しも泣かずに、彼にだかった。「きょうはよくだっこしますね。」(波 152)

59) 「思ったよりたくさん出る。」医者は綿を巻いた針金をさしこんで、中の水を何本も、それへ吸いとらせた。綿には血がついてきた。(暗夜 244)

60) 「ウム、おとうさん、ちょっと、おしっこをしようと思っているんだ。」「そうかい。じゃ、ぼくもいっしょにすらあ。——待ってて。」～「おとうさん、どっちが遠くまで行くかやってみようか。」「ばかなことをいうもんじゃない。」「ほら、ぼく、あんなに行くよ。」(波 345)

次の例では、受け身の形の可能動詞が同様の用法で使われている。

61) 「おとうさん、ぼく、あんなもの^{*}なくなつて、もう大丈夫だよ。——見てごらん。ほら、こんなにかけられるよ。」(波 344) *つえ

この用法であることを示す条件は、動作が行なわれた（行なわれている）ことを示すような場面・文脈と質・程度を表わす連用修飾語（連用規定語）である。

(22) また次のように、過去の相手（または第3者）の動作をとりあげて、非難・意外・あきれの気持ちをこめて、現在未来形でいうことがある。これは、過去の動作として表現しているのではない。潜在的な用法を文体論的に利用したものだろ。

62) 富永の足首には、一か所、かわいたドロのあとがついていたが、彼はそれを発見すると、人さし指にツバをタツプリなすって、こすり落としてしまった。「ネコみたいなまねをしますね。富永さんは——」と、おとくはあきれて、嘆声をもらした。
(青い 107)

63) 「なんですって!」と、田中教師は色をなして、テーブルにからだを乗りださせた。「聞きすてならんことをいいますね。どうして私が生徒をたきつけたというんです?」(青い 88)

64) 「お前はほんとうにおれをばかにするね。」(その妹 107)

65) 「だからやっばし、あなたが好きになっちゃうんだわ、あたし。」～「きみはまたすぐ常談をいう——」(波 272)

第3節 特殊な用法

(23) 動詞の中には、基本的な用法では、他の一般の動詞と変わりなく、現在未来形で未来を表わすが、特殊な用法として、言いきりの述語に用いられた現在未来形で、話の瞬間の話し手（質問・念おしのばあい相手）の心理活動によってとらえられたことがらを表わす用法がある。

〔その1〕 話し手の態度を表わす用法

(24) すでに(9)で述べたように、意志的な動作を表わすばあい、テンスとしては未来を表わしながら、ムードとしては現在の話し手（相手）の意志を表わすニュアンスがつくことがある。ところで、動詞のなかには、態度・主張を表わす単語（ねがう・希望する・みとめる・ことわる・あやまる……）があって、このような動詞が話し手（質問・念おしのばあい相手）を主体とする述語に用いられたばあい、その発言自身が話し手（相手）の態度・主張を示す行為であることから、とくに未来において、態度・主張を示す行為をする必要のないばあいがある。このばあいは、話し手（相手）の現在の状態（態度や主張）の表明であって、テンスの上でも特殊な位置をしめるものである。

66) 「おい、新前のコックさん、指を切らないように頼むよ。」(波 16)

67) 「早くおたずねをねがいます。～」(日本橋 58)

20 現代日本語の動詞のテンス

68) 「人を侮辱しておきながら、とがめられたとあって、遁辞を設けてにげるような破廉恥的の人間と舌戦は無益とみとめる。～」(浮雲 137)

69) 「本当にご同情します。本当にずいぶん苦しかったでしょう。」(その妹 19)

70) 「～。なるほど、手は捨吉でございます。しかし、日付けもないようなふたしかな手紙ではお受けができません。これはおことわり申します。」(春 113)

71) 「人相なんてあたるもの?」「あたるね。他のへっぽこ占いはだめよ。見てもらうのなら、桜田さんそこへ行ってごらんなさい。私が保証するから。」(縮図 231)

72) 「～。ともかく徹底的にやることですね」「徹底的に——。賛成しますな」(青い、90)

73) 「岸本君のために西京^{さいきやう}の健康を祝す。」(春 12)

なお、次のようなものも、これに準じた用法だろう。

74) 「ご成功を心からお祈りいたします。」

75) 「こんどの事件をむしろ君のために悲しみます。」

76) 「市川君、そう君のように言うから困る。～」(春 19)

(25) 「思う」は形式化して、独立の述語というよりも、その陳述的な部分のよう(注)に使われることが多い。

77) 「どうしてどうして、わがはいほど熱心な同権論者は、おそらくはあるまいと思う。～」(浮雲 128)

78) 「～。学生たちの結論はそういうことになったそうですが、そんな点、あなたはどう思いますか?」(青い、299)

79) 「あなたはこんなことはどう考えます?～」(青い、298)

注) これについては、この論文集の宮島達夫氏の調査報告(82～84ページ)を参照。

〔その2〕 話し手の感覚・気分を表わす用法

(26) 人間の感覚や気分を表わす動詞が話し手(質問・念おしのばあいは相手)を主体とする述語に用いられたばあい、現在未来形は、話し手(相手)の現在の感覚や気分を表わすことがある。

80) 「汽車によったんでしょかしらん、頭痛がするの。」(或る女 18)

81) 「～。私もこないだまでは軍人だったんですから、すこしムズムズしますな。」(青い、89)

82) 「～。どうぞすぐあいは、頭痛でもしますか。」(三四郎 119)

資料にはなかったが、〈頭(手・足・腰……傷(口))がいたむ、いらいら(どきどき)する、手(足・顔)がぬるぬる(べたべた)する〉などにもこの用法がある(注)だろう。

注) 第3者のばあいの現在の感覚・気分を表わすには、持続態の現在未来形が使われる。

「彼はいまいらいらしています。」

なお、

「ぼくは、いらいらする。」

「ぼくは、いらいらしています。」

のちがいを明らかにする必要がある。

なお、「感じがする」「気がする」も、この種の用法が形式化したものだろう。

83) 「～。おらなんだか人間でないような気がするよ。」(縮図 131)

〔その3〕話し手の感覚とむすびつけて表わす用法

(27) 日本語には、「見える」「聞こえる」というヴォイス(たちば)の観点からみて、特殊な動詞がある。これらとくみあわせる「が格」の名詞が、現象(もの・映像・音)を表わし、これらの動詞は、その現象が人間の感覚(視覚・聴覚)によってとらえられる状態になることを表わす。これらの動詞は、「もうすぐ花火が見えます。」のようなばあい、普通の動作動詞とおなじように、未来における作用を表わすが(基本的な用法)、次のように、現在未来形で、話し手(質問・念おしのばあいは相手)の感覚によって現にとらえられている現象を表わす点に特徴がある。

84) 「～。ほら、トラックがまだ見えるよ……」(音い 282)

85) 「そこから妙な泣き声がか聞こえるよ。」

86) 野々宮君がまた「どうです、見えますか」と聞いた。「2の字が見えます」というと、「今に動きます」といいながら、向こうへ回って何かしているようであった。

(三四郎 24)

感覚の主体が話し手でなく一般化されたばあいには、これらは潜在的な作用を表わし、現在における可能性を表わす(潜在的な用法^{注)})。次の例のはじめの「見えます」はこれであり、あとの「見えます」は、現在の話し手(あるいは、念おしの意味で相手か)の感覚によってとらえられている顕在的な状態を表わしている。

87) 西島「もっといい室がありそうなものですが。」 静「兄は、ここがやすかったので気に入ったのです。～。ここからあなたのお家のやねが見えます。」 西島「そうですね。」 静「あすこの二階家のうしろにちょっとやねが見えますね。」 西島「ええ。」 静「あれがあなたのお家です。」(その妹 71)

88) 「すこし小さな声ではなしたまえ。人に聞こえる。」(浮雲 118)

注) 第3章の可能動詞の説明参照。

なお、「見える」「聞こえる」には、「目が」「耳が」とくみあわさって、目や耳の能力を表わす言い方がある(潜在的な用法)。

22 現代日本語の動詞のテンス

89) 「～。私の耳は他人よりはよくきこえます。～」(その妹 78)

90) 「うちの赤んぼうはもう目が見える。」

(28) 「見える」「聞こえる」に似た性格のものに、〈音(声)がする、においがする、味がする〉などがある。これらも感覚(聴覚・嗅覚・味覚)とむすびつけて現象を表わす。資料にはなかったが、次のような言い方があるだろう。

91) 「どこからか楽しそうな歌声がします。」

92) 「いいにおいがするね。」

93) 「このさかなはへんなあじがするよ。」

注) これは、〔その2〕であげた「頭痛(めまい)がする……」の表現と関係があるだろう。頭痛(めまい)は人間の内的な現象であるが、音・声・におい・味などは外的な現象である。感覚を表わす形容詞における「手がいたい」と「舌がいたい」との関係に似ているようである(この関係については、この論文集の根本今朝男氏の論文(70, 71頁)を参照)。このへんから〔その2〕と〔その3〕とのつながりをつけることができるかもしれない。

なお、「におう」などにもこの用法がありそうである。

(29) なお、「見える」は、形容詞・形容動詞の連用形や名詞その他の「——に」「——と」の形、動詞の中止形「——て」などとくみあわさって、現在の話し手(相手)の感覚・判断によってとらえられた外見を表わす。

94) 「そんなにこの鼻は高くみえるかなあ。」(島崎藤村 分配 99)

95) 「君は実際よりもだいぶじょうぶそうに見える。」

96) 「～。そして、あなただと、何をしてもそれが当然のように、板についてみえますわ……」(背い 133)

次の例では、形式化して、陳述的な意味を表わしている。

97) 「先生はよっぽど自転車に人を乗せるのが好きだとみえますね。～」(背い 95)

なお、「思われる」も現在の話し手の判断・観測によってとらえられたことがらを表わすことができる。(これにも形式的な用法がある。)^(注)

98) 「で、ふたりは愛しあっているんですか。」「ええ、どうもそうらしく思われますわ。」(波 281)

注) ニュースなどの放送文章で用いられる観測の表現「……ものとみられます」もこの類だろう。ただし、「思われる」「見られる」も、思う主体・見る主体が一般化されて、あいまいになるばあいがある。ニュースなどの表現は、そちらの方か?

「思う」と「思われる」との関係から、〔その1〕と〔その3〕とのつながりをつけることができるかもしれない。

〈付〉 その他の用法

(30) 現在未来形には、以上あげたほかに、次のような用法が資料にみられたが、これについてはまだ分析していない。

〔その1〕 名詞的な用法

提示文の述語として使われるものである。

99) 「～。一番厳肅な時、一番下品な歌をうたう。こうしたゆがめられた、みじめな矛盾は、ぼくたちの身のまわりに無数にある。～」(群い、103)

〔その2〕 ことがらを列挙するばあい

100) 「困った人ね、あなた、病人の話はしないんですか?」「おお、わしの孫だよ。五つだがね。朝のうちは何ともなくて、昼すぎからすこし元気がなくなり、夜になったら急にグッタリして、呼吸づかいが苦しげになっただよ。嫁が泣きだす、ばあさんはギャアギャア騒ぐ。わしは寄り合いから呼びもどされて、ここへ寄こされただよ。」(群い、129)

第2章 過去形

(31) 過去形は、現在未来形とちがって、テンスの意味は多義的でなく、すべて過去を表わす。^(注)過去とは、話の瞬間の直前までの時間である。

注) (37) 以下であげるようなものは例外的な現象である。

便宜上、現在未来形にならって、基本的な用法のばあいと潜在的な用法のばあいとに分けて例をあげよう。

(32) 基本的な用法では、その動詞が語法的な意味として表わす動作・状態が過去の特定の時間における実現や持続を表わす。

(動作動詞の例)

101) 「オヤ、いつ私がそんなことを言いました。」「ハイおとついの晩言いました。」

(浮雲 38)

102) 「先生、びっくりなすった。」「あ、びっくりしたよ。君がくるとはちっとも思っていないかった。まあ、とにかく上がり給え。」(波 91)

103) 「～。私は戦争へゆきました。～」(その妹 16)

(状態動詞の例)^(注)

104) 「そのひとはしばらくここにいましたか。」(波 153)

105) 「え、何しろ熱が高うございますからね。さっき計りました時は、四十度二分もありましたわ。」(波 207)

24 現代日本語の動詞のテンス

106) 「こないだ用があって、三里塚へ行って見たが、ことしは寒かったせいか、桜がまだいくらかあったよ。～」(縮図 128)

注) 状態動詞のばあい、おなじことがらを

{ 「きのうからここにあったよ。」
{ 「きのうからここにあるよ。」

のように、2とおりに表現することができる。はじめの例では、現在の状態は不問にして、過去の状態(存在)を表現しているのであり、あとの例では、現在の状態をも表現しているのであろう。

(33) 金田一氏は、「日本語のテンスとアスペクト」で、ここでいう過去形のテンスを、現在未来形のばあいと同様、「動作相のテンス」と「状態相のテンス」とに分け、前者の意味を「完了」、後者を「過去」であるとして、区別しているが、現在未来形とちがって、この2つを独立の意味として区別する根拠はないようである。過去形の表わすテンスの意味は、ともに過去であるとみられる。

注) 金田一氏は、そこでは、「～シタラ」の形も「～シタ」の形と同列に扱い、「～シタラ」の形で、完了と過去とのちがいが出てくることを根拠の1つとしている。しかし、「～スレバ」と「～シタラ」の対立は、条件の形として、次の述語に対してどんな関係にあるかのちがいを表わすのであって、もはやテンスの対立ではないであろう。

ただし、動作動詞(瞬間動詞)のばあい、完了のニュアンスがつくことがあるばあいもある((35)参照)。過去形の意味にちがいがあるとしても、それは、テンスの意味ではなくアスペクトの意味ないしニュアンスであろう。

なお、金田一氏は、別に『世界言語概説(下巻)』では、完了と過去とを区別せず、ともに《話してある時より以前であること》(176ページ)で一括している。

(34) 第1章第3節であげたグループの動詞も過去形では、テンスとしては特殊なものではなく、一般の動作動詞と変わらない。

107) 「おれはお前が留守の間にいろいろのことを考えた。おれは本当に心細くなった。おれは西島に手紙を書こうか思った。～」(その妹 62)

108) 「しかし、『行介ふたたび登場』という形じゃないか。今だからいうけれども、おれはもうだめだと思ったよ。」(波 243)

109) 「ぼくは、髪の毛の長い魚なんてまっぴらだ。」「へえ、そう。あたしはまた、そ
の方の魚が釣れなかったんで、こんなところに来てるのかと思ったわ。」(波 248)

110) 「～。ぼくは、それをきいて座にいたたまれない気がした。～」(その妹 88)

111) 「あすこを読んだ時、惜しい気がしました。」(その妹 21)

112) 「向うまで、ガスのにおいがしましたわ。」(舞姫 237)

「見える」「聞こえる」にも、この用法があるはずである。^{注)}

注) たとえば,

「きのうの夕立ちのあと、にじが見えた。」

「きのうは一日中まつりのたいこが聞こえた。」

(35) 動作動詞のうち、いわゆる瞬間動詞の過去形は、過去の動作・作用(状態変化)を表わすが、その結果の状態が現在つづいているばあいと、つづいていないばあいとある。前者は、たとえば英語だったら、形容詞の現在形 (be 動詞の現在形) あるいは、動詞の現在完了形を用いるところであろうが、日本語の動詞のテンスとしては、ふつうの過去と区別されない。

次の例は、現在もその結果がつづいている過去の動作をさしているばあいである。

- 113) 「ああ、はらがへったなあ……」～「なんか食べるものがないのか、ガンちゃん?」(青い 75)
- 114) 「どうだえ、楽になったかい。」(縮図 243)
- 115) 老人はちかよってきて、わたしの頭へ手をやり、「大きくなった」といった。(暗夜 12)
- 116) 翌朝かれらは約束の時間にステーションで落ちあった。たいした降りではないけれども、きのうの雨がまだやまなかった。その上、きょうは風がかなり強かった。
「困ったな。」行介は空を見ながら襲子にいった。(波 258)
- 117) 「あら見並さん、どうしたの、涙が出てるわよ。」(波 216)
- 118) 「いまさらそんなこといったって仕方がありませんよ。それより、どこへいったか、その方の心当たりはありませんか。」「わたしには皆目わかりません。」「弱ったな。まさか死ぬようなことはないだろうな。」(波 31)

おなじ動詞でも、次の例では、現在の状態と直接関係のない過去の動作・作用を表わしている。この区別は、文脈・場面や連用修飾語(状況語)などによってなされる。

- 119) 「変なことになったもんだな。……金銭が駒ちゃんのうちのめされた気持ちを回復させるとは思わないが、しかし、一つの解決にはなったよ。～」(青い 244)
- 120) 「なに、女だって、君なんぞのかつて近よったことのない種類の女だよ。それをね、長崎へバイキンの試験に出張するから当分だめだってことわっちまった。ところが、その女がりんごを持ってステーションまで送りに行くと言いだしたんで、ぼくは弱ったね。」(三四郎 274)
- 121) 「それでどうしたい。」「原告の請求は棄却されてしまったのさ。」(波 163)

もちろん、現在その結果がつづいているかどうか不明のものもあるだろう。過去形にとって、それは、どうであってもかまわないのである。

注) 現在未来形が、あるばあいには現在における未完了のニュアンスをもつことがあるのに対して、過去形は、あるばあいには現在における完了のニュアンスをもつことがあるわけである。瞬間動詞のばあい、完了とは結果の実現であるところから、現在その結果がつづいているばあいも過去形が使われるのである。しかし、このばあいも、完了は独立の意味ではなく、結果が現在の状態として残っているかどうかは、文脈・場面などが示しているのであって、過去形が示しているのではない。

(36) 過去形にも潜在的な用法がある。このばあいも、過去(の一定期間)において、主体などと動作・状態との関係が潜在的になりたつていたことを表わす。

次は、過去のある期間にくりかえしあらわれたことがらを表わすばあいの例である。^(注)

122) 「あの時もさ、君はよく指を切ったぜ。～」(波 16)

123) 「あなたはちっとも私にわるいことをなさらなかったじゃありませんか。あなたはいつでも私に力を与えてくださいましたわ。～」(その妹 122)

注) このばあいも、現在未来形とおなじように、特定の個々の時間の指示があれば、基本的な用法である。

次は、過去のある期間において、条件がなりたつときにあらわれることがらを表わすばあいの例である。

124) 「～。原始人は、空腹を感じると、いづどこでも、手づかみでナマの物を食べた。～」(青い 124)

125) 「～。そのくせ人がちよつとも悪口いうとすぐ食ってかかった。～」(その妹 40)

このほかに、過去のある期間においてなりたつ主体(対象)の潜在的な属性を表わすばあいもあるはずである。^(注)

注) 資料にはなかったが、たとえば、

「秀吉は、小さいときの名を日吉丸といった。」

「恋という字は、昔はむずかしい字を書いた。」

〈付〉 その他の用法

(37) なお、過去形には、いくつか注意すべき用法がある。

視覚でみとめられる動作・作用が話し手の目の前で起こったばあい、話し手は、それを発見して伝えるわけである。だから、こうしたばあい、過去形の文には、話し手がそのできごとを発見したというニュアンスがつきまとう。

126) 「いま、沼田先生の顔にはウソをついてる表情がハッキリと現われました……」
(青い 253)

127) はじめにそれに気づいたのは新子だった。「来たわ、六助さん、さっきの人たち

よ……」(青い, 192)

これらは、話の瞬間以前に実現された動作・作用であるから、問題はない。次のようなばあい、存在そのものは、過去から未来にかけて変わっていないので、現在未来形を使ってもよいわけであるが、発見のばあいには、発見した時(過去)の状態として表わすことができるわけである。これは、「ある」「いる」など、存在を表わす動詞にみられる。

128) 「あった、あった。なあんだ。こんなところにつっこんであったんだ。」(波 14)

129) 「あった、あった……。井戸がありましたよ。～」(青い, 131)

130) 「何だそこにいたの。いつ来たんです。」(縮田 189)

資料にはなかったが、すでに予定されていた未来のことがらに気づいたときにも過去形が使われることがある。このばあいは、未来のことをいっているので、特殊な用法である。

注) たとえば、「あっ、しまった。あしたは約束があった。」のように。これは「ある」に限られるようである。

この用法は、名詞述語文の「あしたはぼくの誕生日だった。」の用法に通じる。

(38) 話し手は、過去のことがらについて自分のふたしかな記憶をおもいおこして、それを相手にたしかめることがある。このばあい、過去形の文には、話し手のたしかめのニュアンスがつく。たとえば、「きみはたしか富士山にのぼったね。」というように。これは過去のことがらであるから、テンスとしては別にとりたてる必要はない。

ところが、次のようなばあい、過去の存在や習慣をおもいおこして、相手にたしかめている例であるが、その存在や習慣などは現在もつづいていることなのである。だから、現在形を使ってもよいのであるが、こうしたたしかめの文では、過去形も使われるので、注意しておこう。

131) 「きみはたしかおっかさんがいたね。」(三四郎 262)

132) 「また、外国語が出ましたな。ノウは英語にもありましたね。」(青い, 161)

133) 「きみは酒はだめだったが、たばこは吸ったね。」

相手に関することがらについてのたしかめのばあい、三上章氏は、《相手を既に知っているという気持を表わすことが敬意になる》として、これを《儀礼的な》過去と呼んでいる。(『現代語法序説(旧版)』227ページ)

(39) このほかに、バナナのたたきうりのようなばあいに、客が「よし、買った」と意志表示をすることがある。《買うことにきめた》の意味である。話の瞬間には、まだ金をはらっていないから、《買う》という動作は過去のものではない。

特殊なばあいである。

また、過去形は、

134) 「のいた、どいた、どいた」と叫ぶ。(日本橋 184)

のように、命令の意味に用いられることがある。この用法には、ていねい体(「～ました」)は用いられない。また、文体にも特徴がある。テンスのふつうの用法から孤立した化石的な用法であろう。^(注)

注) 金田一氏は、「そうそうきょうは誕生日だった」「買った!」「どいた!」の「～た」は、テンスから除いている。(「日本語のテンスとアスペクト」4,7ページ)

なお、「どいた!」などの「た」は、いわゆる終止形ではなく、「たれ」という命令形から変化したものであるという説もある。

(40) 「しめた!」「しまった!」「よし、きた!」などはすでに感動詞化したものだろう。

第3章 動詞の分類

(41) 以上のように、過去形は、例外的な用法を除いては、すべてのばあい、テンスの意味としては、過去を表わす。

これに対して、現在未来形は、特殊な用法として第1章第3節にあげたものを除いても、なお、未来と現在未来という2つの意味を表わす。その2つの意味のあらわれ方を条件づけるのは、動詞の意味的な性格と用法である。

動作動詞は、基本的な用法では、現在未来を表わさないが、潜在的な用法では、状態動詞に似て、現在未来を表わす。しかし、そのばあいも語い的な意味としては、依然として動作・作用であり、一般的には状態の変化である。つまり、動作動詞が未来を表わしたり現在未来を表わしたりするのは、動詞の語い的な意味がちがうためではなく、その文法的な用法がちがうためである。そこで、動詞の分類とその文法的な用法との区別を明確にしておく必要がおこる。

ここでいう動作動詞・状態動詞という分類は、動詞の語い的な意味の表わすことがら状態の変化か不変化かという語い的な意味の性格によるものであるが、文法に関係のない単なる語い的な分類ではない。そのような特徴によって分類することを要求するのは、基本的な用法における現在未来形のテンスの意味であって^{注1)}、文法的なものである。と同時に、これは、単なる文法的な分類でもない。それは語い的な意味のもっている、変化か不変化かという性格にもとづく分類であり、語い的な意味と密接に関連するからである。したがって、この分類は、《語い

文法的な^{注2)}分類であり、動作動詞・状態動詞というものは、《語い文法的なカテゴリー》である。

注1) 金田一氏が「国語動詞の一分類」で指摘しているように、この分類は、基本態の現在未来形のテンスだけではなく、他のいろいろなテンス・アスペクトの文法的な意味・用法と関連している。

注2) 語い文法的なカテゴリーの代表的なものとしては、品詞がある。動作動詞・状態動詞という分類はこの品詞のうちの動詞の下位区分の一つである。この種の動詞のカテゴリーとしては、ヴォイス的な性格による自動詞・他動詞やムード的な性格による意志動詞・無意志動詞などがあるだろう。

一方、ここでいう基本的な用法と潜在的な用法の区別は、動詞のテンスの形を、文の言いきりの述語として使うさいに、動詞の語い的な意味のどの側面（実現や持続の面かあるいは潜在的な属性としての面）を現実の時間と関係づけるかというちがいである。これらは、一般的には、動詞を文法に従ってどのように使うかという、いわば《文法的な使用のカテゴリー》のものである。

(42) 金田一氏の「国語動詞の一分類」には、動詞の種類とそれに関係するさまざまな文法的な現象についての重要な事実が豊富に指摘されているが、ここでいう語い文法的なカテゴリーとそれの文法的な使用のカテゴリーとの区別が明確にされていないところがある。そこでは、たとえば、動作動詞（瞬間動詞とか継続動詞）を《状態動詞として用いた》というような表現が使われることが多いが、そのばあいすでにその動詞は動作動詞（瞬間動詞とか継続動詞）ではなく、状態動詞であるとみなされているようである。そのために、せっかくの動詞の分類とその意義があいまいになっている。氏自身その論文の52ページに次のように問題点を指摘している。

例えば、「読む」は継続動詞の一例として挙げたが、(中略)。「この子は相当難しい本でも読む」と言う場合は、「読む」を「この子」の属性と考えたもので、「読む」は状態動詞として用いたものだと思う。(中略)

このように考えて来ると、二類以上の動詞を兼ねている動詞の数は非常に多く、たった一類だけの中におさめ得る動詞は非常に少ないのではないか、否、全然ないのではないか、とさえ疑われ、このような分類は果して可能であるか、と言う根本問題にも突当るのであるが、(後略)

(43) 動作動詞と状態動詞という分類を語い文法的なものとして位置づけ、文法的な使用のレベルと区別すると、多くの動詞は動作動詞か状態動詞かのいずれかに分類される。^{注)}

注) 多義語のばあいは、かならずしもそうではない。多義語の意味のうち、ここでい

30 現代日本語の動詞のテンス

う語い的な意味の性格がちがえば、それに応じて、別の種類に分かれることになる。たとえば、「火事がある」の「ある」は動作動詞であり、「本がある」の「ある」は状態動詞である。

この分類で問題になる動詞としていわゆる可能動詞がある。

可能動詞は、現在未来形では、現在における可能性・能力を表わすのがふつうである。

135) 「～。あの子はいい娘ですわ。それに字も書けますわ。～」(その妹 123)

136) 「ところで、あなた、踊れる? 私は女子大で教わったから踊れるけど……」
(青い 47)

137) 「車夫はきょうは使いにしました。女だってこのくらいなものは持てますわ。」
(三四郎 96)

138) 「父と母が、きのうの朝から、近在の親類の祝言によばれていって、ぼくひとり留守番なんだよ。それあぼくだって飯ぐらいたけるさ。～」(青い 10)

139) 西島「妹さんはそれを心配していらっしやいました。」広次「そうでしょう。妹の心はわかります。～」(その妹 118)

ところが、可能動詞の現在未来形は、また未来における、その可能性・能力の実現(可能性・能力という潜在的なものの顕在的なものへの転化)をも表わす。

140) 「～。いま四五年もすれば、私も副主人公の資格を得られますけど……。～」(青い 249)

141) 西島「うそだ。あすになれば、皆わかる。お前は野村の妹には感謝していいんだよ。～」(その妹 104)

142) 「飯を食ったらすぐ帰るからネ。千代子の方もちょっと催促してくれ。」膳を運ぶ女中に緒方はこういった。「ねえ。それはそうと、お供はいつできるの?」とその老妓がいった。(暗夜 111)

未来における可能性・能力の実現のばあいの用法は、動作動詞の基本的な用法と変わらない。問題は、現在における可能性・能力のばあいをどうみとめるかという点である。状態動詞の基本的な用法とみとめるか、動作動詞の潜在的な用法とみとめるかということである。

金田一氏は、可能動詞を状態動詞に入れている。わたしの用語に従えば、前者のようにみなすのである。(「国語動詞の分類」50ページ)

しかし、そうみなすと、未来における可能性や能力の実現のばあいとの関連がたちきられてしまう。

過去形では、可能動詞は、過去の特定の時間における可能性・能力の実現を表わすほう(注)がふつうである。

143) 「アア、ごくろうさま、きょうはどうだったい——うまく面会ができたかネ。」(春 199)

144) 広次「書けたかい」静「はい」(その妹 13)

145) 「～。診察の結果、この子には俳優の素質が多分にあることがわかりました。」(青い 94)

146) 「だんな、わかりました。わかりました。この奥です。」(波 117)

注) 資料にはなかったが、過去における可能性・能力を表わすばあいもありうる。たとえば、「10年前には、このへんの土地は坪1,000円で買えた。」など。

また、可能動詞には、持続態のアスペクトがあり、そこではもっぱら可能性・能力の実現という変化の面が問題となる。

147) 「あら、ご弁解になることなんかないじゃありませんか。あたくし、ちゃんとわかっておりますわ。^(注)～」(波 369)

148) 広次「～。だけどこれ以上はかけないのだ。これだって、目や口がどこについているかわからない。」静「ちゃんとかけていますよ。」(その妹 10)

注) 金田一氏は、「わかる」について、「《「分っている」の場合の「分る」は、「理解出来る」の意の「分る」とは別語で、「知識としてもつ」の意の自動詞で、これもまた瞬間動詞である。》と述べているが(「国語動詞の分類」51ページ)、これは別語(別の意味)ではないだろう。「わかる」は可能動詞であって、「理解できる」という能力・可能性を表わすと同時に、その能力・可能性が単に潜在的なものにとどまらず、顕在的なものに転化するという変化をも表わすことができるかとみるべきだろう。「理解できている」という表現も可能である。ただし、「完成する」「できあがる」の意味の「できる」は可能の「できる」とは別の意味であろう。

(44) そこで、可能動詞の語的な意味の性格について考えてみる必要がある。語的な意味は、具体的には、文法的に使用されたすがたで、文の中にしか存在しない。われわれは、そこから語的な意味を抽象しなければならないわけである。

可能動詞としては、いわゆる終止形(つまり現在未来形の1つ)のふつうの用法(つまり可能性・能力を表わす)が意識されやすく、その語構成上もとになった動詞との対比の中で、その語的な意味として、《もとになった動詞の語的な意味(動作)が可能である》という可能性・能力という面が強調されやすい。しかし、可能動詞の語的な意味は、文の中での文法的な形(現在未来形・過去形その他)やアスペクトの形(「～シテイル」「～シテクル」「～シテイク」……)のいろいろな用法から抽象しなければならない。

ここでは、そのうちのほんの一部しか扱っていないので、結論的なことはい

えないが、現在未来形の2つの用法や過去形の用法や、さらに持続態（「書けている」）・近づき態（「書けてくる」）・遠のき態（「書けていく」）の用法をみると、可能動詞は、むしろ、《もとになる動詞のもつ語法的な意味（動作）の可能性が現実化する》という変化を表わすとみるべきではないか。つまり、可能動詞の語法的な意味の性格は、状態の変化（潜在的なものから顕在的なものへの転化）であって、動作動詞に属するとみるべきではないか。もしそうだとすれば、可能動詞は、現在未来形で、基本的な用法として、未来における可能性・能力の実現を表わし、潜在的な用法として、現在未来におけるそのような実現の可能性・能力を表わすとみとめることができ、2つの用法の関連がはっきりするだろう。

ただし、可能動詞は、現在未来形で主として、潜在的な用法に用いられるという点でふつうの動作動詞とちがった特殊な性格をもっているとしなければならぬ。これは、動作動詞から状態動詞へ移行しつつあるものと位置づけられるかもしれない。

注) 過去形については、大量の調査にまたなければならないが、おそらく、他のふつうの動作動詞にくらべれば、潜在的な用法に使われる率は、可能動詞の方が高いであろう。

(45) なお、可能動詞に似た性格をもつ動詞に所要（必要）を表わす「かかる」「いる」や効果（効力）を表わす「きく」「ためになる」などがある。このほかにもまだあるかもしれないが、これらも、現在未来形は潜在的な用法として潜在的な作用を表わすことが多い。

149) 「こいつはエンジンのぐあいが悪くて足がのろく、仲間じゃあいザリの六〇八号と呼んでるぐれえの代物だから、まあ三時間半ぐれえはかかるな。～」(青い 275)

150) そこはI一町といって、仙台からまだいぶ先になっていた。「どのくらいかかる？」(縮図 152)

151) 「～……中風をなおす薬はないものかね？」「ないね。いまのところ、中風には医者よりもミコの方がきくね。～」(青い 132)

152) 「富永さんは探偵小説がすき？ 私、少し研究してるのよ。なかなかためになるわ。～」(青い 118)

これらの例では、潜在的な作用として、必要・効力を表わしているが、やはり過去形では、顕在的な作用を表わすのがふつうであろう。

153) 「君が、あんまり余計な話ばかりしているものだから、時間がかかって仕方がない。いいかげんにして出てくるものだ」「よほど長くかかりましたか。」(三四郎 70)

154) 「しかし、波子さんは、矢木さんと別れようかと言うのに、二十年かかりましたね。～」(舞姫 241)

「きく」の例はなかったが、「やっと薬がきいた。」など、ふつうに使われるだろう。

なお、持続態もある。（「今は薬がきいている。」「今月はすでに治療代に5,000円かかっている。」など）

現在未来形が未来の作用（実現）を表わすばあいもあるはずである。たとえば、「あと30分もすれば、薬がきくよ。」^{注)}

注) 例の149なども、あるいは未来の実現を表わしているのかもしれない。

(46) 動詞の分類の上で問題になる動詞として、このほかに、「ちがう・似合う・あたる（相当する）」などがある。これらは、現在未来形では、主体と対象とのあいだに何らかの関係があるという現在未来の状態（あるいは性質）を表わすことが多い。

155) 「その羽織はなかなかりっぱだ。よく似合う。」(三四郎 201)

156) 品子はつい心をよそに弾いていると、野津が寄ってきて、「どうしたの？ ちょっと早い。いつもちがう。」(舞姫 207)

157) 「～。石田くんの所へいってお頼みなさるも、課長さんの所へいってお頼みなさるも、その趣は同一じゃありませんか。」「イヤ、ちがいます。～」(浮雲 154)

158) 「あ、其方は民助の何にあたるか。」(春 236)

過去形の例は、資料には適当なものはないが、やはり状態を表わすことが多いようである。^{注)}

159) 「これでも若いころは、すらっとしてましたから、着物が似合いました。」

160) 「いまでこそ人種的な偏見はすくなくなったが、昔はちがった。」

注) ただし、「あたる」の過去形「あたった」はあまり使われないかもしれない。かわりに「あたってた」が使われるようだ。

そこで、このような点からは状態動詞とみなしてよいようだが、一方、この種の動詞は、持続態「ちがっている・似合っている・あたっている」をもっている点で、他の状態動詞と区別される。^{注)} 持続態のばあいは、これらの動詞は、ある関係になる（はいる）という変化を表わしていることになる。

注) 金田一氏の「国語動詞の一分類」では、「ちがう」と「あたる」について、基本態のばあいは、状態動詞、持続態のばあいは、動作動詞（第四種の動詞）とされている。

基本態と持続態とで、動詞の語法的な意味がちがうと考えるのは無理であろう。これも可能動詞の類にならって、基本態の用法を潜在的用法であると考えることができるかもしれないが、その基本になる基本的な用法がほとんどみあた

34 現代日本語の動詞のテンス

らないところが可能動詞の類とちがっている。可能動詞より一層状態動詞化する^{注)}すんだ過渡的な動詞かと思われるが、ここでは、結論は出せない。

注) 次の「ちがいました」は過去における関係の表現とみるべきか、あるいは、過去における関係の実現の表現とみるべきか、ちょっとまよう。

161) 「～。馬一匹でひくきれいな馬車があるの。～。ヒヨコ一羽の力は五千分の一馬力だとしたら、馬車をひっぱるのに幾羽のヒヨコが必要ですか」「それは五千羽でしょう——」～「オホホ……違いました。～」(青い、119)

この種の動詞には、このほかに、「含む」「相当する」「あたいる」「存在する」「(ねだんが〇〇円)する」などがある。

補注) なお、関係を表わす「あたる」などは、「『モンテクリスト伯』を書いたデュマは、『椿姫』を書いたデュマの父にあたる。」のような歴史的事実を表現できる。このようなばあいのテンスについては、形容詞・形容動詞や名詞の述語文にみられる次のような表現とあわせて、改めて考えなければならない。

「リンカーンはアメリカの第16代の大統領である。」

「リンカーンはえらい。」

「リンカーンは偉大だ。」

(47) 個々の動詞について、動作動詞であるか、状態動詞であるか、また可能動詞の類であるか、関係を表わす類であるかという認定の作業はまだ行っていない。こまかくみていけば、さらにいろいろ問題がおこると思う。ここで一括したものの中にも段階をつけなければならないものがあるだろう。

第4章 む す び —テンスとアスペクト—

(48) 以上、現在未来形・過去形の用法と意味とを考察したが、ここで、そのまとめをかねて、現代日本語の動詞のテンスとアスペクトの関係について、すこし考えてみよう。もとより、わたしはまだテンスとアスペクトの体系のほんの一角しか、しかも荒っぽくしかほじくっていないので、ここから結論めいたものを出すことは危険であり、また、そのつもりもない。ここでは、この小論で行なった分析の仕方などを反省しながら、これからの研究への足がかりをさぐってみたい。

(49) 第1章第3節であげた特殊な用法は、話し手の心理的な活動と関係づけられたもので、その位置づけについては、なお問題があるので、あらためて論ずることとして、別扱いとすると、現在未来形のテンスの意味には、未来と現在未来の2つがある。

この多義的な意味のそれぞれのあらわれ方を条件づけるものとして、わたしは、2つのカテゴリーをとりあげた。1つは、動詞の語い文法的なカテゴリーとしての動作動詞(A)・状態動詞(B)の別であり、1つは動詞のテンス・アスペクトの形を文の中で使うさいの文法的な使用のカテゴリーとしての基本的な用法(a)と潜在的な用法(b)の別である。この2つのカテゴリーが次のようにくみあわさって、現在未来形のテンスの意味を条件づけるわけである。

動作動詞(A)の基本的な用法(a)……未来	} ……現在未来
状態動詞(B)の基本的な用法(a)	
動作動詞(A)の潜在的な用法(b)	
状態動詞(B)の潜在的な用法(b)	

つまり、現在未来形のテンスの意味のあらわれ方を条件づける点からいえば、このくみあわせは、

Aa/Ba, Ab, Bb

と分かれる。Aaの表わすことがらは、特定の時間における動作・作用の実現であり、一般的には、変化である。それに対して、あとのグループの表わすことがらは、特定の時間における状態や性質(Ba)であり、潜在的な動作・状態(Ab, Bb)であって、^{注)}顕在的か潜在的かの別はあっても、一般的には、特定の時間における不変化であるといえることができる。

注) 一般に性質といわれるものの中には、顕在的なものも潜在的なものもあるようである。

そうすると、現在未来形のテンスの意味のあらわれ方を直接条件づけているのは、この2つのカテゴリーのくみあわせの表わす「変化」「不変化」であるとみなすことができる。このような、一定の用法における動詞の形が表わす変化・不変化という意味的な性格を、動作動詞・状態動詞という名づけにならって、《動作性》《状態性》と呼ぼう。

過去形にも動作性のばあいと状態性のばあいとある。この2つの性格のあらわれ方は、現在未来形のばあいと同じである。ただし、過去形のテンスの意味は、この2つの性格のちがいかかわりなく、過去である。

(50) 動詞の表わすことがらが動作性であるか状態性であるかは基本態以下のアスペクトでも問題になる。それどころか、持続態(「～している」)や結果態(「～してある」)のように、もっぱら動作動詞を状態性にするためのアスペクトが存在する(結果態はヴォイス的な性格をもったアスペクトであり、動詞はさ

らに制約があるが)。ここでは、補助的に使われた動詞「いる」「ある」の状態性がアスペクトという文法的な意味を表わす手づきとして使われているわけである。その他のアスペクト（「～してしまう」「～しておく」「～してみる」「～してくる」「～していく」……）は、動作動詞の基本態とおなじく、基本的には動作性を表わすが、用法によっては、状態性を表わすようである。

注) ただし、近づき態「～してくる」、遠のき態「～していく」というアスペクトは、基本態とちがって、現在進行中の動作・作用を表わすことができるようである。たとえば、

「湯かげんはどうですか」「どうもありがとう。ど^んど^んわいてきます。」

「たまはぐんぐんのびて^います。ホームランです。」

このアスペクトは、さらに持続態をもつ点で、もっぱら状態性である持続態や結果態と区別される。これについては、この論文集の宮島氏の調査報告(79ページ)参照。

このようにみえてくると、動作性・状態性は、アスペクトという文法的なカテゴリーの意味であることがわかる。とくに、用法にかかわりなく、つねに状態性を表わすアスペクトのあることは、そのことがらをうらづけている。

アスペクトとは、大まかにいって、動詞の表わす語的な意味（動作・作用や状態・性質など）が、どのようなあり方をしているかを表わす文法的なカテゴリーである。動作性・状態性という意味は、こうした、ことがらのあり方のなかの基本的なものであろう。

基本態はアスペクトとしての意味が動作性・状態性とすくなくとも2つあり、多義的なのである。

わたしは、この小論で、基本態の現在未来形の意味のあらわれ方を分析するために、動詞を動作動詞と状態動詞とに分け、その用法を基本的な用法と潜在的な用法とに分けたが、実は、その分析は、直接的には、テンスの意味を分析していたのではなく、基本態のアスペクトの意味を分析していたことになる。つまり、基本態のアスペクトの多義性が現在未来形の多義的なテンスの意味のあらわれ方を条件づけていたために、基本態のアスペクトの意味を分析したのである。

ただし、ここでは、アスペクトの意味を、テンスの意味を条件づけるかぎりにおいて分析したのであって、全面的にそれを行なったのではない。アスペクトとして、動作性・状態性という文法的な意味は、おそらく基本的なものであろうが、抽象的、一般的なものであり、いろいろなアスペクトを扱うなかで、下位区分する必要があるだろう。しかし、ここでは、動作性・状態性をさらにどう分析するかとか、第3のものがあるかどうかなどについては、いっさい答えていない

のである。

たとえば、一定の条件で使われた動詞の表わすことがらが、特定の時間において顕在的であるか潜在的であるか、ということは、アスペクトの意味として分けるべきかどうかとか、第1章第2節であげた、潜在的用法の3つのばあいの別はアスペクトとして意味をもつのかどうかなど、そのままアスペクト論の問題として残されるわけである。

なお、ここで文法的な使用のカテゴリーとした基本的な用法や潜在的な用法は、文法のなかにどう位置づけられるのかについても不明のままである。

(51) 非常に大ざっぱな言い方をすれば、言いきりの述語に使われたばあいのテンスにとって直接に重要なのは、アスペクトという文法的な意味が動作性であるか状態性であるかということである。動作性・状態性を条件づけるもの(語意的な意味の性格、潜在的用法を条件づける文脈など)は、テンスにとっては間接的な意義しかもたないのではないか。それは直接的にはアスペクトの問題なのでないか。

テンスは直接にはアスペクトと関係する。動詞の語意的な意味は、アスペクトを媒介にして、テンスと関係する。さらに、アスペクトと語意的な意味とのあいだには、動作動詞・状態動詞という語い文法的なカテゴリーがある。このカテゴリーは、語意的な意味の《アスペクト的な性格》にもとづく動詞の分類であると規定できるだろう。^(注)

注) (42)で指摘した金田一氏の動詞の分類における問題点は、この語意的な意味のアスペクト的な性格と、アスペクトそのものの文法的な意味との混同であるともいえるであろう。

以上のようなテンスとアスペクトの関係は、否定形のテンスのアスペクト、基本態以外のアスペクトの形のテンスとアスペクトの調査研究のなかでたしかめられなければならない。

〈資料とした作品一覧〉

有島 武郎	『或る女』(前編)	岩波文庫
石坂 洋次郎	『青い山脈』	新潮文庫
泉 鏡花	『日本橋』	岩波文庫
川端 康成	『舞姫』	新潮文庫
志賀 直哉	『暗夜行路』(前編)	岩波文庫 (旧かな版)
島崎 藤村	『春』	新潮文庫

38 現代日本語の動詞のテンス

島崎 藤村	『嵐』(『伸び支度』『分配』)	岩波文庫
徳田 秋声	『縮図』	岩波文庫
夏目 漱石	『三四郎』	岩波文庫 (旧かな版)
二葉亭 四迷	『浮雲』	岩波文庫
武者小路実篤	『その妹』	岩波文庫
山本 有三	『波』	岩波文庫

(1954. 10. 31)